

社会福祉法人ファミリーユ高知

2022年度 事業報告書

自 2022年4月1日

至 2023年3月31日

① 高知ハビリテーリングセンター

事業所名	事業名 (定員)	事業説明	ハビリの特長
障害者支援施設 多機能型→定員40名	自立訓練 機能訓練 20 生活訓練 10	自立した日常生活又は社会生活ができるよう、一定期間、身体機能又は生活能力の向上のために必要な訓練を行います。 機能訓練・・・1.5年間 生活訓練・・・2年間	機能訓練では主に病院退院後の身体・高次脳機能障害がある方に対して、継続したりハビリテーションと社会復帰に向けたアプローチを行います。生活訓練では知的・精神・発達障害がある方に対して生活の自律や社会参加、地域移行に向けたプログラムを提供し、特別支援学校卒業生の専攻科機能も有しています。 ※県内唯一の機能訓練事業所
	生活介護 10	常に介護を必要とする人に、昼間、入浴、排泄、食事の介護等を行うとともに、創作的活動又は生産活動の機会を提供します。	様々な障害特性を持つ方に対して、興味や関心が得られるその人らしい日中活動の提供に加えて、施設入所と協働して生活支援を行い、安心・安全な生活の実現を支援します。
	施設入所 40	施設に入所する人に、夜間や休日、入浴、排泄、食事の介護等を行います。	自立訓練への通所が困難な方や生活支援が必要な方に対して、心身の体調管理や食事・排泄・入浴等の介護、生活上での自立場面の増加などを目的に支援を行います。
	短期入所 (ショートステイ) 2 空床	自宅で介護する人が病気の場合などに、短期間、夜間も含め施設で入浴、排泄、食事の介護等を行います。	施設入所の利用状況に合わせて事業を運営し、レスパイトが必要な家族のニーズに応え、地域生活の継続に寄与します。
アルベータ	就労移行 10	一般企業等への就労を希望する人に、一定期間、就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練を行います。(2年間)	職業訓練だけでなく、職場実習を通して実際の業務を体験する機会を大切に、ジョブマッチングを図っています。また、就職後のサポートを継続して行う事で就労を継続し企業との連携を大切に支援を行っていきます。
	就労定着支援	障害福祉サービスを利用して一般就労に移行した障害者が就職した職場で定着して働き続ける為に、必要な支援を行います。(3年間)	
	就労継続支援B型 40	一般企業等での就労が困難な人に、働く場を提供するとともに、知識及び能力の向上のために必要な訓練を行います。	
はるのハビリホーム	共同生活援助 (グループホーム) 36	外部サービス利用型の類型(介護サービスは委託契約を結んだ指定居宅介護事業者が行う)をとり、障害のある人が日常生活上の介護や支援を受けながら共同生活を送ります。	ホーム全体がバリアフリーとなっており身体障害者の方や様々な障害を抱えた方に対応できます。お部屋のタイプもユニットタイプ(居間・食堂など共有)とマンションタイプがあり、安心・安全な毎日を送っていただくように設備しております。
キュール	障害児通所支援事業 放課後等デイサービス 10	学齢期の障害児に放課後や長期休暇中の居場所を提供し、障害特性に応じた環境設定や自立を促進する為に必要な支援の提供を行います。	自然豊かな環境を活かし、室内だけでなく屋外でのレクリエーションを取り入れ、長期休暇中には外出支援や様々なイベントを企画し、余暇の充実を図っています。他事業との連携から、中高生を対象とした就労準備型としての取り組みを行っています。
相談支援事業所	2022年4月1日～休止	特定・・・ 障害者の自立した生活を支え、障害者の抱える課題解決や適切なサービス利用に向けてケアマネジメントをよりきめ細かく行います。 障害児・・・ 特定と同じですが、対象を障害児とします。	当センターの事業を利用している利用者のマネジメントができることでサビ管との連携がスムーズになります。当センターの利用希望をする障害者に対して、支給決定の参考となる書類を市町村窓口へ提出していくことで、利用開始までの流れがスムーズになります。

② しごと・生活サポートセンターウェーブ

事業所名	事業名 (定員)	事業説明	ウェーブの特長
オウんパス	就労継続支援A型 10	一般企業での就労に不安や困難がある障害者に、雇用契約に基づき就業の機会を提供します。(65歳未満)	地域の病院のユニフォームやタオル等のクリーニングを請け負っています。仕事をしていく中で自身の特長と向き合い、働き続けるためのスキルを学んでいます。クリーニング師の資格取得もすすめています。
スウェル	就労継続支援B型 40	一般企業等での就労が困難な障害者に、働く場を提供するとともに、知識及び能力の向上のために必要な訓練を行います。	施設内では軽作業とクリーニング作業を行っており、施設外では病院周辺の清掃や地域の農家の方からの依頼を請けて畑作業やハウス作業なども行っています。また作業以外でも文化祭などの余暇活動なども行っています。
相談支援事業所		特定・・・ 障害者の自立した生活を支え、障害者の抱える課題解決や適切なサービス利用に向けてケアマネジメントをよりきめ細かく行います。	新規利用相談から利用開始までの流れがスムーズになり、ウェーブのサビ管との連携も取りやすく、より個々の希望に応じたサービス調整が行えます。

はじめに

2022年12月、高知ハビリテーリングセンター（以下、ハビリ）では年の瀬が迫る中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第8波にのまれ、2カ月間にわたり常に感染者が数名発生している状況でした。幸いにも重症者は出ず、全員軽傷で回復されています。長引く感染対策と、コロナ疲れに向き合いながら安全な事業運営に尽力した1年でした。また、ロシアのウクライナ侵攻により世界情勢が不安定化し、物価上昇が続き、多機能な福祉事業を運営するハビリにとって大きく影響を受けた1年でもあったと思います。

このような状況のなか、「誰かの人生について本気で考えられる人」を職員像として掲げ、法人全体での成果発表会、ハビリ職員全員による実践事例発表を着実に展開し、目の前の利用者支援に取り組んでまいりました。こうした取り組みが、利用者ひとり一人の個別性を尊重し、持っている健康な力を活用して自律を促す結果となり、様々な地域からの利用相談が増えています。ハビリが様々な障害者に対する支援を総合的に行う地域の拠点としての役割機能が果たせるよう実践を重ねていきたいと思っています。

事業概要

2018年9月のセンター長交代からこの5年間で、組織体制の見直しと、業務改善、支援力強化、人員不足の解消に努め、2023年3月現在、78名の職員と3部門11事業の運営を行っています。特に支援力強化においては、看護師、理学療法士、作業療法士の採用を行い、専門的視点からの評価と支援員の教育に努め、多種多様な障害に対する受け入れが可能となる基礎作りが整いました。しかし、コロナ感染に起因する新規相談の減少やサービス利用控えが発生し、目標としていた稼働率の達成はできませんでした。

2023年5月には、新型コロナウイルス感染症も「5類」に移行され、これまでの感染対策が大きく変わることになりますが、施設としては先の経験を踏まえ、引き続き感染予防に努めると同時に、「アフターコロナ」での開かれた施設づくりを再構築してまいります。

(2022年度 社会福祉法人ファミリーユ高知の全事業を参照頂きながらお読み下さい)

【障害者支援施設・自立訓練】

自立訓練の機能訓練は、高知県下唯一の事業で、主に脳卒中後の社会生活リハビリテーションを提供しています。セラピストによる評価に基づいたプログラムの立案と提供が行えるようになり、利用者個々の状態に沿った地域生活につながるようになってきました。生活訓練は精神障害者を対象とした社会的入院からの地域移行や様々な生活課題をもたれている利用者に対して、実生活で活かせる能力の獲得を目指した訓練を提供しています。この1年自立訓練の両事業は、障害の評価と見立て、そして利用者の自己決定と現実検討への寄り添いができるようになったことで、円滑に地域生活につなげることができるようになりました。2021年度の実績で、復職につなげ、6カ月以上就労継続が来ている利用者が4名おり、アウトカム評価として2023年度の就労移行支援体制加算で約10,000,000円の収入が見込まれています。一般就労だけではなく、同じ敷地内にあるはるのハビリホームや、アルベータB型事業、就労移行などのサービスへの移行が進み、繋がった先で順調に生活が送れるようになるなど、経営的にも良い循環が生まれています。

【アルベータ就労支援事業】

就労移行・就労定着事業は、新たな取り組みとして個別担当制の導入と、企業見学や実習の準備・実践・振り返りをより丁寧に実施し、利用者の就労準備性を高めることで4名を一般就労に繋げることが出来ました。また、2018年10月に開始した就労定着支援事業も4年目を迎え、3年間の利用期限を満了した方が5名となり、順調に勤続年数を重ねています。

B型事業では、61名が登録され生産活動や楽しむ機会を通じて、就労に必要な能力の向上や生活支援を行っています。身体・知的・精神・高次脳機能障害など多様な障害に対して現在約80社との取引をしながら、障害特性及び一人ひとりに合った仕事環境を提供し、稼ぐ喜びを感じていただいています。また、高知県内・他事業所の平均工賃が20,597円に対して当事業所の平均工賃も20,945円を達成することができています。

【はるのハビリホーム】

支援の統一を図る目的で入居者のケース会を世話人参加型で行い、入居者とは主体性を高める目的にてユニット会を開催いたしました。入居者の希望や困りごとを直接聞かせていただき一緒に問題を解決したり、行事を企画するなど自治の要素ができた1年でした。

【キュール】

退職や産休など職員の異動があったため、新しいチーム作りを優先課題として取り組みました。組織のダウンサイジングと同時にコロナ感染拡大の影響を受け稼働率が低下しました。キュールにとって大きな出来事として、キュールを利用していた児童が18歳となり、ハビリの障害者支援施設に入所し生活訓練にて親元を離れて生活の自立を行い、その後ハビリの就労移行を利用し、2023年1月に一般就労された方がいます。子供から大人までの「就労」につながっていくためのワンストップサービスを展開し、支援の流れを構築できたことは本来描いていたハビリのあるべき支援の方向性ではないかと思えます。

【相談支援事業所】

人員不足により2022年3月31日をもって休止となっています。再開を望まれる声も多く聞かれ事業再開を目指して取り組んで参りましたが、人員不足を解消するには至りませんでした。

事業の詳細な利用状況や取り組み内容については、事業毎に報告書を作成し後方に添付しております。また、8つの委員会の活動実績と事故報告及び、ご意見・苦情に関するもまとめておりますので、ご参照ください。

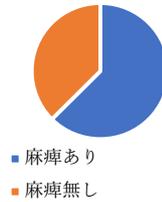
障害者支援施設 施設入所

■2022 年度平均稼働率 78.4% 一日平均利用者数 31.3 名

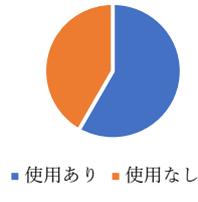
■2022 年度利用者状況

機能訓練（登録者 24 名）

麻痺の状況別



車椅子使用者



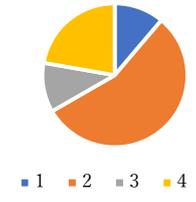
約 6割が身体に麻痺があり、約 6割の方が車椅子を利用している状況でも排泄・入浴などの日常生活や健康管理等の身体機能の自立を支援する。

生活訓練（登録者 9 名）

障害別



障害区分別



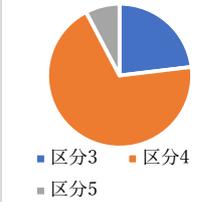
精神障害や発達障害がある人が多いのが特徴で、地域で自立して暮らしていく為に実生活場面を通して経験と支援を実施し、実用的な能力獲得を促す。

生活介護（登録者 13 名）

障害別



障害区分別



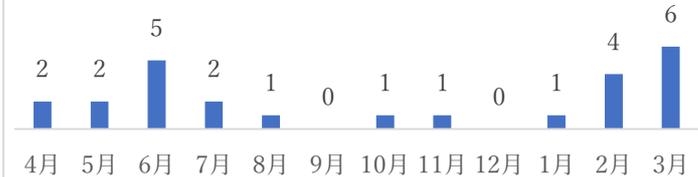
日常生活場面で介助を必要とする多様な疾患を持つ方に対して、個々の特性に合わせた活動を提供し可能性を拓げる支援を実践。

■ハビリ独自の体験利用

- ◆体験し相互の利用意思の確認
- ◆支援の見立てを評価
- ◆病院との違いを理解

⇒98%の方が体験利用から正式利用に繋がる

体験利用者数（人）



■2022 年度の事業目標達成度を評価

『職員全員で学び、考え、利用者の希望を叶える事業所へ』

■学ぶ姿勢と機会

今年度は HIV をもつ脳腫瘍摘出術後の方、触法行為により矯正施設入所中の方の新規利用相談があり、関係機関からの研修会等を通して病態や制度についての理解を深めました。当初は支援に不安をもつ職員がおりましたが、正しい知識を得ることで利用開始に至り、職員のスキルアップに加え障害者支援施設の役割を再認識する機会となりました。資格取得に関しては介護福祉士の取得 1 名（予定）、防災士取得 1 名の実績がありました。利用者の支援に関する疑問や課題があればミニカンファレンスを開催する等、職員間で相談し日々の支援に反映する体制が出来つつあります。

■考えて提案ができる

新人や経験年数の少ない職員に対してベテラン職員が排泄ケアや入浴介助の手技を OJT 中心で指導を行うことでスキルアップに繋がっています。また、個別担当制は定着しており、利用者の 24 時間シートの作成や情報提供書・ケース会資料などの役割を担っています。今後は生活介護のプログラム立案も担えるよう努めます。人材確保に関しては介護労働安定センターの受講生を対象にインターンシップを実施し、お一人ずつ丁寧に体験していただいた結果、1 名の就職が決まりました。

■叶える支援

利用者からの要望に真摯に向き合い、障害特性に応じた外出や外泊の個別対応、Wi-Fi 利用を目的とした休憩室の開放や施設内イベントへの参加、日中プログラムでカラオケを実施するなど、各部署と協力しコロナ禍の中でもできることを検討し実現しました。

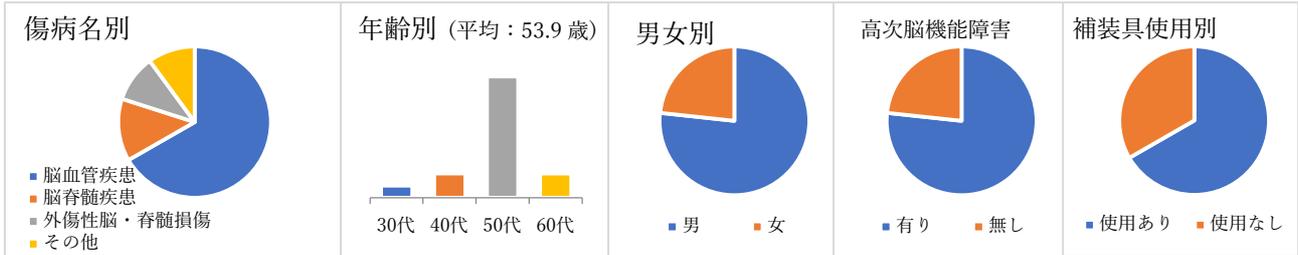
■総括

今年度は施設入所利用者からコロナ感染者が発生しましたが、利用者の感染対策への理解と協力、迅速な隔離対応、事業を越えて生活・訓練部が一体となって支援を行うことでクラスターの発生なく終息することができました。また緊急ショートステイを 2 名受け入れ、地域からのニーズに応えました。来年度も個々の利用者の生活課題の解決に向き合い、利用者の思いを叶える支援に努めたいと思います。

機能訓練

■2022 年度平均稼働率：98.2% 一日平均利用者数：19.6 名

■2022 年度利用者状況（登録者 30 名）



利用終了者（10 名（うち通所者 4 名））

転帰先(生活拠点) 6名		転帰先(日中活動) 10名		施設外支援（年度総数 23 件）			
自宅復帰	1	一般就労・復職	1	家屋訪問調査	10 件	職場訪問調査	1 件
グループホーム	1	福祉就労 (A型・B型)	1	住宅改修支援	3 件	訪問機能訓練	2 件
当センター施設入所	2	就労移行	1	福祉用具決定支援	2 件	就労移行見学・実習	1 件
障害者支援施設	2	家事・趣味活動	1	補装具作成支援	2 件	A 型・B 型見学・実習	2 件
		デイサービス	2				
		生活介護	4				

利用者の約 7 割は脳血管疾患を患われ、50 代の男性が多いのが特徴でした。働き盛りの年齢で、背景としては高血圧症・糖尿病・脂質異常症などの生活習慣病の既往や、喫煙、アルコールの多量飲酒などをベースに持たれ、リハビリテーションの実施と同時に生活習慣の見直しを要される方が多く見られました。また、車椅子・装具等の補装具の利用者は約 7 割、高次脳機能障害の併存者は約 8 割と、身体機能と高次脳機能両面での支援を要する方が多数を占めています。それぞれの目標に向けた訓練を実施し、終了者 10 名のうち 3 名の利用者を、就労（福祉的/一般就労）に繋げることができました。

■新規利用者数：計 13 名（施設入所 11 名、通所者 2 名）

13 名中 8 名が回復期リハビリテーション病棟からの紹介で、他の 5 名は今まで相談実績のなかった医療機関からの紹介でした。疾患も、脳脊髄疾患、うつ状態、アルコール依存関連症、不安障害、高度肥満など、身体障害とはいえ様々な原疾患がベースにある利用者が増えています。

■2022 年度の事業目標達成度を評価 『リアルな生活場所や日中活動の自己決定に繋げる』

■ステップアップを利用者が実感できる

訓練では、ご本人と面談・目標の再設定を繰り返しながら利用者の目標を確認し、目標に基づく活動や訓練の提供を行いました。また、それぞれの利用者の「目標」「生活課題」「訓練プログラム」が一覧で見ることができる“活動一覧表”を新たに作成し、支援内容の可視化を試みました。さらに、利用者の変化に応じて内容を更新していくシステム（PDCA サイクル）を取り入れ、状況に即した訓練が提供できるようにしました。これを活用したことで、面談時にはご本人に客観的な変化をお伝えすることができ、ご本人の実感とモチベーションの向上へ繋げることができました。

■訓練成果を最適な日中活動に繋げる

日々の生活課題に対しては、ご本人と入所スタッフと合同で面談を実施し、必要なタイミングで具体的な支援が行えるよう取り組みました。日常生活動作（食事や移動、排泄・更衣・整容・入浴・洗濯など）に対しては、模擬訓練からリアルな生活場面での実践に携わり、利用者一人一人の生活能力の向上に繋がりました。退所後の地域生活を想定し、家庭訪問・職場訪問等を行い、それぞれの環境に合わせた動作訓練や自動車運転・公共交通機関の利用訓練等を実施しました。ご本人の思いや能力を活かせる生活場所・日中活動について繰り返し話し合い、ご本人の自己決定とその暮らしをを活かした生活へ繋げることができるよう努めました。

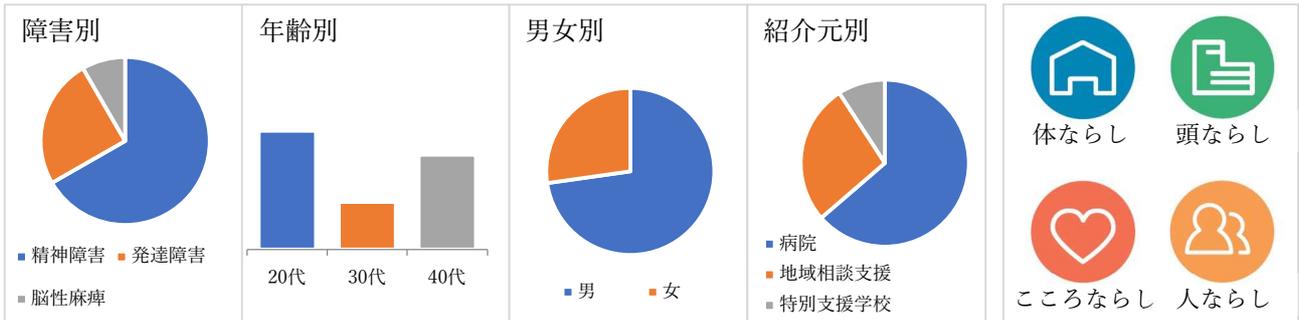
■経過を紹介元にフィードバックする

利用終了時には、紹介元に、電話等にて転帰先と経過についての報告を丁寧に行いました。今年度はコロナ感染の状況等を考慮し、積極的な病院訪問等は行えませんでした。利用者の経過を可視化したものをパンフレットとして作成中であり、紹介元等に配布できるよう計画中です。

生活訓練

■2022 年度平均稼働率 70.0% 一日平均利用者数 7.0 名

■2022 年度利用者状況（登録者数 11 名）



特別支援学校から紹介いただいた若年の脳性麻痺の利用者以外は身体機能が自立している精神障害者が医療機関退院後に利用されるケースが多く、精神障害の中でも発達障害者の利用が増加しています。年齢は 20 代が約半数を占め、若い男性が多いのが特徴です。4つの「ならし」を軸に様々なプログラムを提供し、社会生活力の向上と評価に努めた結果、利用者個々の障害に合わせた次の生活ステージに繋ぐことが出来ました。

■新規利用者（3名）の傾向

本年度の新規相談 14 名のうち新規利用に至ったのは 1 名で、残り 2 名は昨年度から相談を開始しているケースでした。昨年度の相談ケース（31 名）に比べ相談数が減少しており、利用開始に至る方も 1 割以下となっています。相談の約 8 割が精神・知的・発達障害のいずれかを持つ方です。見学案内までは繋がるものの、家族・支援者と当事者の意向が合わなかったことが理由で利用につながらないことが多くみられ、動機づけが難しい状況があります。

■利用終了者（4名）の転帰

	住む場所	日中活動
利用者 1・2	施設入所（当センター）	生活介護（当センター）
利用者 3	グループホーム	就労移行
利用者 4	入院（精神症状悪化）	

■2022 年度の事業目標達成度を評価 『実生活で活かされる能力の獲得を支援します！』

■障害特性に合わせたプログラムの充実

利用者個人の課題に応じて体調管理・掃除・入浴・整容・金銭管理など生活に必要な技術について座学や実践を行い、生活を支える施設入所職員との情報共有に努めました。また、本年度の特徴としてケア会議や受診同行等を通じて医療機関との連携を密にしました。

■訓練室外での活動を充実

毎日散歩を行い、移動・歩行訓練を行っています。畑作業では植え付けから収穫、調理までを計画的に行っています。公共交通機関の利用や受診の自立を目的に適宜外出訓練を実施し、自立を支援しました。余暇時間の充実に関しては次年度以降の課題と考えています。

■地域ニーズの掘り起こし

特別支援学校からは一定のニーズがありますが、高校 2 年時点で進路が決定している実情を踏まえ、1~2 年生の実習先に選ばれる営業が必要と考えます。また、年間を通して参加している精神障害者地域移行・地域定着戦略会議では重度の慢性疾患をもつ高齢者が議題に挙がり、当センターの利用者層とは異なるため、今後も当センターの啓蒙が必要と思われます。

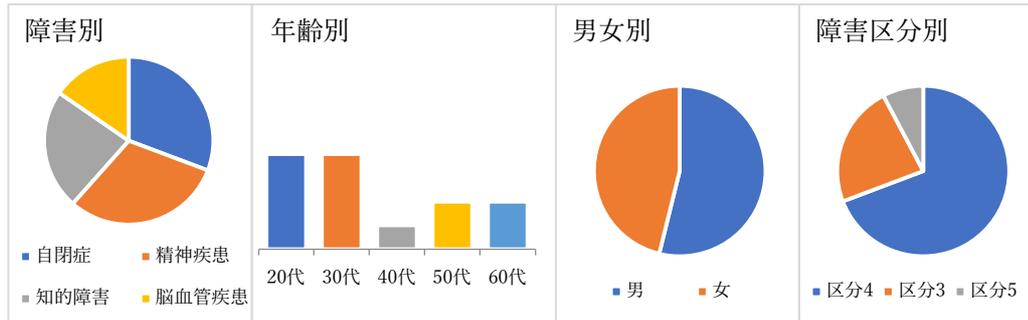
■総括

様々な年齢や個性をもつ利用者の課題に対して、担当者による面談や個別支援を提供することで生活技能やコミュニケーション能力が向上し、実生活場面にも反映されています。生活訓練終了後を見据え、日々の評価や体験利用を行い、ご本人の希望と能力に合致する社会資源に繋ぐことができました。生活訓練の新規相談者は障害特性上、相談から利用開始まで長期間の準備を要する方が多い傾向がありますが、1 ケースずつ丁寧に対応し、新規利用に繋げたいと思います。次年度の取り組みとして営業活動はもとより、見学や体験利用時のプログラムを充実させ新規利用者増加に努めます。

障害者支援施設 生活介護

■2022 年度平均稼働率 74.4% 一日平均利用者数 7.4 名

■2022 年度利用者状況（施設入所併用 13 名）



年度当初は自閉症をもつ利用者が半数在籍されていましたが、うち 3 名が障害特性にあった障害者支援施設や在宅生活に移行されました。新規利用者に関しては、当センターの生活訓練終了後の精神疾患をもつ利用者 2 名、機能訓練終了後の脳血管疾患をもつ利用者 2 名が生活介護へ移行されました。障害特性の異なる利用者に対して集団の中で屋外移動の練習や個別のプログラムを提供し、小さな変化を大切に支援することで、利用者の日中活動のバリエーションが増え、達成感に繋がっているように思います。また、生活場面での介助が必要な方に対して支援を提供し、安心安全な生活場所の提供に繋がっています。

■2022 年度の事業目標達成度を評価 『もう一歩先へ。新しい可能性にチャレンジできる支援』

■もう一歩先のオーダーメイド支援

生活介護のご利用者は劇的に能力が向上するといった大きな変化はありませんが、運動やプリント課題だけでなく、季節感を感じられる作品作りと展示、編み物、手指訓練など個別プログラムの内容を日々見直して提供することで、その人らしさや得意を発掘し、日々の生活に充実感や達成感が得られています。また、50 歳代以上の身体障害がある 3 名の利用者に対して、機能訓練と兼務している理学療法士がリハビリテーション計画に基づくプログラムを立案し提供することで身体機能の維持や必要な福祉用具の使用に繋がりました。

■チャレンジ

今年度は自立訓練の終了者 4 名が生活介護へ移行となりました。利用者自身にとって大きな変化であったと思いますが、移行前の見学や体験利用、職員間での引き継ぎ、プログラム内容の作成などソフトランディングに努め、生活介護の職員も日中活動を真剣に考える機会となりました。コロナ禍で外出支援が中止となりましたが、障害者支援施設全体でのカラオケ大会や秋祭りに参加することで楽しむことができています。

■健康管理

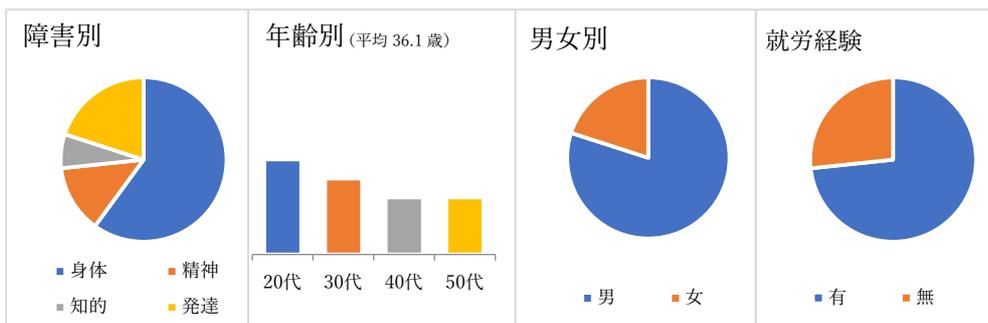
利用者の中にはご自身で間食量の調整やスマートフォンの使用時間などの管理が困難な方がいるため、本人・家族と相談した上で管理を手伝い、肥満の解消や規則的な生活リズムが保たれ健康の維持・改善に繋がっています。また、週に 3 日は屋外に出て季節感を感じながら運動をする習慣が定着しました。

■総括

生活介護では精神・知的・身体などに様々な障害特性をお持ちの利用者を支援しています。中には外出や外泊が生活のルーティーンに欠かせない方もいるため、コロナ禍ではありますが本人・家族に感染対策のご協力を得ながら止めることなく実施し、利用者にとって出来るだけ制限の少ない生活に寄与することができました。今年度は利用者の入退所の動きが大きかったですが、年度末には施設入所の併用利用者が定員数の 10 名となりました。利用者の中には自立訓練終了後も施設入所・生活介護相当の方が一定数おり、県下の社会資源の中で当センターの利用継続ニーズがある方に関しては責任をもってお引き受けし、利用者数の増加に繋がる見通しがあります。

就労移行支援

■2022 年度利用者状況（延べ登録者数 15 名）※就労アセスメント除く



利用者種別について、上期は身体障害の方が多かったですが、その後就職につながる方も多く、現在は精神障害、発達障害の方の割合が高くなっています。年齢層や就労経験の有無は様々であり、就労等の経験が乏しく働くことへのイメージを十分に持てない方や、これまでの経歴から自身の考えが固定化されている方もおり、他機関と連携し、評価や実践の機会を増やし、利用者の新たな学びを大切にしたい1年でした。

■利用終了者

- ・一般就労：4 名
- ・その他：4 名（他事業所の就労移行：1 名、他事業所の B 型：1 名、自宅：2 名）

就職先	業務内容	就職日
ニチイケアセンター	介護補助	2022/7/28
ウィルオブワーク高知	テレフォンオペレーター	2022/10/14
ローソン高知	事務補助	2022/10/16
土佐市役所	事務補助	2023/1/9

■2022 年度の事業目標達成度を評価

■就職率・職場定着率の維持向上

就職率：50%・就職継続率：100%

■支援力強化

研修

（ワンモア豊中での外部研修・就業支援基礎研修・テレワーク研修・県への説明会依頼 等）

■業務の効率化

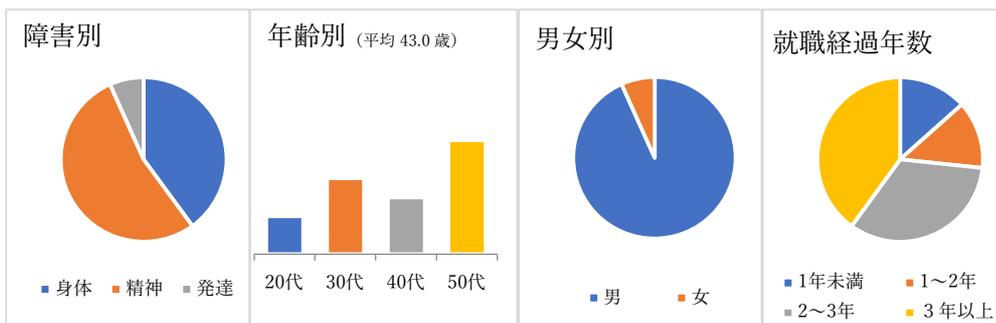
部会等、会議の見直し・障害者職業センター等の外部機関の活用

■総括

上期は概ね稼働率 100%超を維持しましたが、その後は精神的な不調等による利用終了が重なり、大きく稼働率が低下しました。また、職員の入れ替りもあり、利用者個々に対する見立てや連携が不十分であった為、必要な訓練につながりにくかったことも反省点として挙げられます。下期からはこれらを見直す為に個別担当制を敷き、より密に関われるようにしました。また、これまでの事業所内訓練だけではなく、障害者職業センターにおける職業評価を取り入れ、より客観的な職業適性を行いました。その他、企業見学や実習の準備・実践・振り返りをより丁寧に実施し、利用者の就労準備性を高めることで就労に繋げることが出来ました。しかし、新たな新規利用者獲得については課題を残す結果となりました。

就労定着支援

■2022年度利用者状況（延べ登録者数 15名）



就職前から職場と関係性を築くことで、アフターフォローを経て滞りなく定着支援に繋げ、また、その後も連携して業務上の課題や体調面の変化を捉えられています。精神障害の方が半数以上を占めていますが、内訳の大半は高次脳機能障害の方です。40代以上の割合が比較的多いですが、皆さん受傷前の経歴に拘らず、新しい分野でも意欲的に業務に取り組み、順調に勤続年数を重ねています。

■新規利用者：3名

就職先	業務内容	就職日	定着開始日
土佐市役所（会計年度任用職員）	事務補助	2021/12/6	2022/6/6
高知県庁（会計年度任用職員）	事務補助	2022/4/1	2022/10/1
ニチイケアセンター	介護補助	2022/7/28	2023/1/28

■利用終了者：6名

就職先	業務内容	就職日	定着終了日
希望ヶ丘学園	事務補助	2018/10/18	2022/4/30（満期）
きんろう病院	医療事務補助	2018/10/23	2022/4/30（満期）
国立高知病院	医療事務補助	2019/3/18	2022/9/30（満期）
土佐市役所	図書館事務補助	2019/5/21	2022/11/30（満期）
南四国スズキ販売	自動車整備	2019/8/1	2023/1/31（満期）
土佐市役所	事務補助	2020/6/1	2023/3/31

■総括

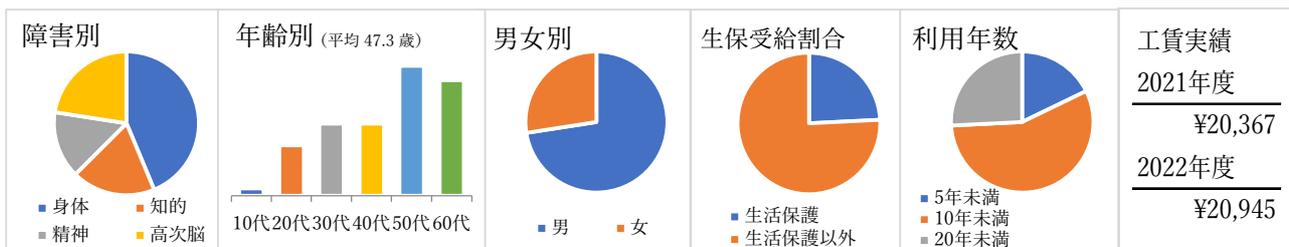
2018年10月に開始した就労定着支援事業も4年目となり、3年間の利用期限を満了した方が5名となりました。休職や退職をした方につきましては、それぞれ復職・転職支援を行う等、その後の道筋を立てられるよう支援しています。

休職や精神的な不調により就労が困難になる要因としては、病状悪化等の個人要因や担当者の変更等の環境要因等様々あり、継続就労の為に定着支援の重要性と、本人はもちろん、企業や家族との関係性をしっかりと構築していくことが大きな鍵であることを考えさせられる1年でした。

利用終了者につきましては、その後の支援を障害者職業・生活支援センターに引継ぐ等、支援を受け続けられる体制を保てるよう心掛けています。

就労継続支援 B 型

■2022 年度利用者状況を可視化（登録者 61 名）



利用者の層に大きな変化はなく、多くの利用者が送迎等を利用し安定的に通所されました。昨年に引き続き、多くの機関からの問い合わせがあり、就労 B 型の高需要は続いています。多様な個々に対応すべく現在、約 80 社との取引をしながら、障害特性に合った様々な仕事環境を提供し、ひとり一人の安心感のある働き方をサポートし、一緒にチームで取り組みました。

■紹介元（新規相談：25 名、内利用に至った方：3 名）

医療機関：1 名 特定相談：10 名 障害者相談：3 名 特別支援学校：5 名 市町村：2 名
 当センター他事業（自立）：1 名 家族：1 名 ケアマネ：1 名 地域定着支援センター：1 名

■新規利用者の傾向

他事業所での対人関係上の問題、介護サービスからの移行、触法のケースなど様々です。

■利用終了者（2 名）

自宅：1 名 施設：1 名

■コロナ禍における支援

本人や家族、GH の意向により長期間利用休止になる方が数名おり、また年末にはクラスターによる 5 日間の休所を余儀なくされましたが、連携強化を図り、電話連絡等で最大限対応することができました。取引業者ともタイムリーな調整を図り、大きな滞りは発生しませんでした。

■2022 年度の事業目標達成度を評価 『チャレンジがスキルアップにつながる職場へ！』

■取引先の信頼を深める

取引業者の受注増加で売上増 取引業者から仕事に対する評価として 20 万円の寄付贈呈

■スキルアップと工賃アップ

2022 年度平均工賃実績 20,945 円（前年度比+578 円） 2021 年度全国平均 16,507 円
 年間売り上げ金額：34,394,715 円（前年度比+1,328,082 円）

■社会人として楽しむ

食事を楽しむイベント、くじ引き大会を実施
 with コロナ 2019 の中で例年に負けない時間を実施

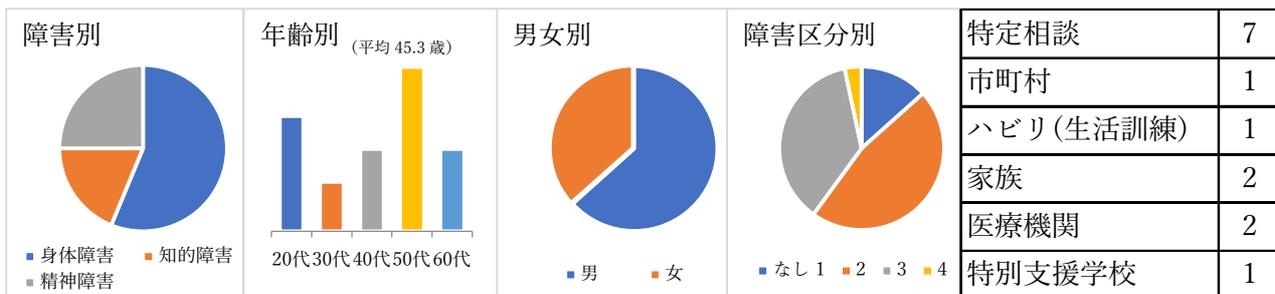
■総括

今年度は、昨年度開始した新規事業に携わる利用者および職員を増やし、また質の向上を図りました。コロナの猛威を身近に感じ不安も高まる日々の中でしたが、体調確認や標準的な感染対策に努めました。他事業所が体調不良者の対応に苦慮する中、近森病院はじめ近隣医療機関の大きなサポート体制の下、感染拡大を防ぐことができたことが前年度+αになった大きな要因です。

B 型の核であった中山主任が長期不在であっても B 型職員のチームワークの良さやフットワークの軽さ、何事に対しても前向きに共に取り組む姿勢や雰囲気を利用者の安心や意欲につながり、取引業者からの評価そして微増ですが、工賃アップにもつながったと考えます。まだまだ、道半ばではありますが、B 型全体の体制の更なる検討と働きやすい環境の整備に少しずつ取り組めたことも来年度に向けた大きな一歩になったと考えています。

■2022 年度利用者状況を可視化（登録者数 30 名）

新規相談元（14 件）



新規利用者（3 名）

	障害別	年齢	性別	紹介元	日中活動
1	身体	21	男	ハビリ(生活訓練)	就労移行
2	精神	43	女	近森総合心療センター	生活訓練
3	精神	54	女	特定相談	B 型

利用終了者（2 名）

	障害別	年齢	性別	転居先
1	知的	37	男	共同生活援助
2	身体	66	男	有料老人ホーム

障害別、年齢、区分は昨年と利用者の層は大きな変化はありません。新規相談件数 14 件に対して新規利用者は 3 名でした。内訳としては、グループホームでの受け入れが困難と判断したケースが 3 件、相談元からの相談終了が 3 件、当施設内別事業への紹介 3 件、社会資源を知る目的としての見学が 2 名でした。2022 年度はコロナ感染が施設の中でも発生しましたが、生活環境が個室であり感染対策を講じながら拡大を最小限に防ぐことができました。

■2022 年度の事業目標達成度を評価 『あなたの思い』を実現できるホームに！

■安心と安全とチャレンジ

- ・体調不良や事故発生時等には状況に応じて医療、家族との連携を図り適切な対応ができるよう調整しました。
- ・コロナ感染が発生した状況でリスク管理に捉われ、利用者の生活を管理する意識が強くなってしまいました。余暇に対する支援が不十分となり、利用者には窮屈な生活になってしまいましたが、感染対策を講じながら感染拡大は防ぐことができましたと考えます。

■相互理解と行動

- ・利用者を知り尽くすため、世話人を交えケース会実施。職員が不在の時間帯の利用者の様子も知ることで理解を深めることができました。

■気持ちの充実と達成

- ・利用者の「やりたい」を聞き取るために毎月のユニット会を開催しました。設備の不備や季節を感じられるイベント等のニーズが聞かれていました。コロナ禍で思うようなイベントが開催できませんでしたが、感染対策を講じながら利用者の余暇の時間の充実を図る目的と「やりたい」を実現するため、映画鑑賞やピザパーティーを実施しました。
- ・サービス管理責任者のモニタリングやケース会を軸に利用者の気持ちを汲み取ることに専念しました。

■総括

利用者を知るための土台作りは 2022 年度である程度整備はできたと考えます。これから利用者の課題ややりたいに取り組む支援を実践し、達成できた時、我がごととして一緒に喜べる関係性を構築したいと考えております。

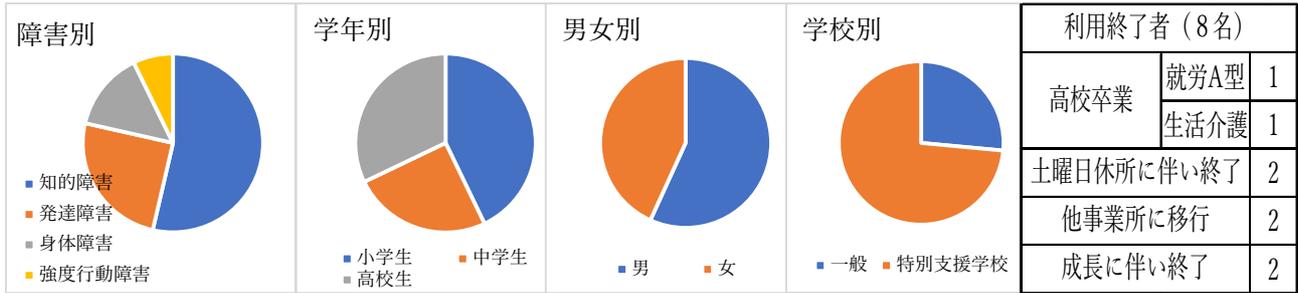
そして、新規利用者獲得に向けて、ホーム独自のパンフレットの作成や広報も視野にいれつつ、外部機関との連携も丁寧に対応し満床に向けて取り組みたいと思います。

放課後等デイサービススクール

■2022 年度稼働率 77% 1日平均利用者数 7.7名

■2022 年度利用者状況 登録者数 28名

利用終了者 (8名)



知的障害をベースに自閉症スペクトラム・身体障害・強度行動障害などの重複した障害をもった児童が通所しています。放課後や長期休みに学習と生活の支援や余暇活動を通して療育を行っています。コロナ禍で行動の制限はありましたが、夏のプールや買い物、陶芸、BBQ等のイベントを行い、実体験から学ぶ機会を提供しています。2022年度は職員の異動や児童発達支援管理責任者の産休が予定されていたため、新規児童の受け入れは行わず、安心・安全を第一に考えて運営しました。



■2022 年度の事業目標達成度を評価 『子どもの成長をのがさずキャッチ!!』

■見る:支援の見える化

日誌に今日の成長という項目を作成し職員が子供の日々の成長を意識できるようになった。児童の生活スキルや課題などをまとめたことにより職員で情報共有できるようになった。成長全般を把握するための評価表の導入は出来なかったが、身体的な成長を定期的に計測することとした。

■観る:意識的な視点の獲得

ケース会では支援員が担当制で計画を立て、課題や支援の状態をチームで検討している。個別担当制にすることでより深く児童の状態を考えることが出来た。

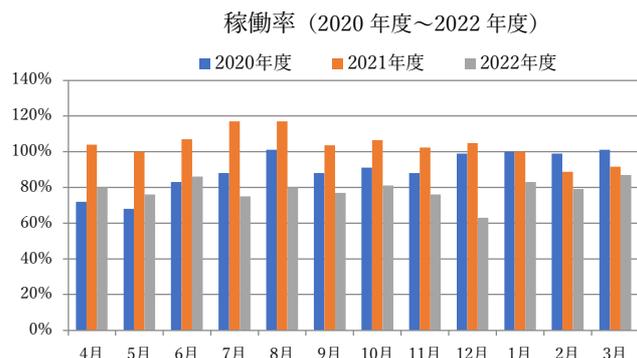
■視る:支援の評価と可視化

ケース会や担当者会などで支援を振り返り、評価に応じた目標の立案と課題の可視化を行った。特に担当者会では他施設の支援を学ぶ機会となり、自施設の取り組みとの比較や効果を考える機会となった。また安全な送迎ができるよう送迎マニュアルを作成した。

■総括

2015年より土曜日の開所を続けてきましたが、2022年12月末で土曜日を休所することにしました。これは平日に職員が揃い、情報伝達や対応の統一を図り、支援の質の向上を目的としたためです。今年度は新規の受け入れをせず、開所日も縮小したことで全体的にダウンサイジングの一年となりましたが、継続して利用いただいている障がい児の支援につ

いて、職員全員で考え・動くことでチームとしてのまとまりが強くなりました。来年度には新規児童の受け入れも決定しており、安心・安全な運営と100%の稼働率を目指します。



ふくらむ委員会の取り組み

■総括

2022年度も引き続き新型コロナウイルス感染症の影響で大きなイベントは中止となりましたが、各事業コロナ渦の中でも工夫を凝らした取り組みをされており、広報誌も充実した内容を載せることができました。今年度は感染対策を施しつつ、秋祭りや地域の行事参加、小規模な花火大会など利用者に喜んでもらえる企画を実施できたと思います。また、資格取得や研修報告など施設、個人の取り組みも取り上げることができました。

■委員会開催一覧

実施月	内容	実施月	内容
4月	春夏号記事確認	10月	秋号完成、発送準備作業、発行 新年号記事提案
5月	春夏号記事確認、校正	11月	新年号記事確認
6月	春夏号完成、発行 秋号記事提案、発送準備作業、発行	12月	//
7月	秋号記事確認 発送マニュアル作成	1月	新年号完成、1年振り返り、発送準備作業、発行 春夏号記事提案
8月	流会	2月	春夏号記事提案、確認
9月	// 秋号完成	3月	//



■ふくらむ委員会

実施回数：12回（毎月1回第4火曜日）

実施内容：掲載記事の打ち合わせ

発行部数：春夏号600部、秋号500部、新年号500部

内関係機関発送部数：各号200部（学校、医療機関、行政機関、事業所、福祉サービス事業所他）

2023年度へ

- 読む人が笑顔になるような記事を掲載します。
- 年3回の発行を継続し発送先においても精査し、広く広報誌を知っていただくように努めます。
- 定期的な委員会活動を行い、記事の提案や情報共有を行っていきます。
- 新たな取り組みや、頑張っている人にスポットを当て、楽しい紙面づくりを目指します。
- 動画での各事業所紹介や発送作業のB型委託など新たな取り組みを検討していきます。

安全衛生委員会の取り組み

■総括

毎月の安全衛生巡視においてご指導を頂き、経年設備の修繕や清掃等を行うことで、労働環境等を改善することが出来ました。また、職員一人一人も指摘箇所の改善等を通して安全や衛生への意識を高めることが出来たと考えられます。

■安全衛生委員会

	実施日
第 1 回	2022 年 4 月 21 日
第 2 回	2022 年 5 月 19 日
第 3 回	2022 年 6 月 16 日
第 4 回	2022 年 7 月 21 日
第 5 回	2022 年 8 月 18 日
第 6 回	2022 年 9 月 15 日
第 7 回	2022 年 10 月 20 日
第 8 回	2022 年 11 月 17 日
第 9 回	2022 年 12 月 28 日
第 10 回	2023 年 1 月 19 日
第 11 回	2023 年 2 月 16 日
第 12 回	2023 年 3 月 16 日

- ・実施内容
 - ・職員の健康状況（感染症・メンタルヘルス含む）を報告し必要に応じて助言を頂いた
 - ・前回指摘事項に対する改善状況を報告
 - ・安全衛生に関する資料や情報提供
 - ・施設内巡視

■職員・職員家族 体調不良者状況

	非感染症	外傷	労災	その他
4 月	1	0	0	1
5 月	2	0	0	1
6 月	3	0	0	0
7 月	1	0	0	1
8 月	2	0	0	2
9 月	1	0	0	2
10 月	0	0	0	0
11 月	2	0	0	2
12 月	0	0	0	0
1 月	2	0	0	0
2 月	3	0	0	0
3 月	5	0	0	1
合計	14	0	0	9

※感染症は感染対策委員会資料をご参照下さい。

2023 年度へ

- ・毎日の体調確認と感染対策を行い、利用者・職員ともに健康を維持し事業運営を行っていきます。
- ・安全衛生委員会を定期的開催し、必要に応じて改善を行うことで作業環境の整備に努めます。
- ・衛生管理者資格取得を計画的に進め、人材育成に努めます。

栄養委員会の取り組み

■総括

今年度は施設内でコロナ感染が発生し、エームサービスと連携をとり、施設職員の協力も得ながら感染拡大をしないような食事提供を行いました。また、施設栄養士が変更となり、イベントメニューや訓練メニューが提供できなかった時期もありましたが、利用者が安心して楽しく食事をできるよう、取り組みを行いました。

■実施状況

	実施日
第 1 回	2022 年 4 月 19 日
第 2 回	2022 年 5 月 17 日
第 3 回	2022 年 6 月 21 日
第 4 回	2022 年 7 月 19 日
第 5 回	2022 年 9 月 20 日
第 6 回	2022 年 10 月 18 日
第 7 回	2022 年 11 月 11 日
第 8 回	2022 年 12 月 20 日
第 9 回	2023 年 1 月 17 日
第 10 回	2023 年 2 月 21 日
第 11 回	2023 年 3 月 28 日

■実施内容

①感染症発生及び感染対策に配慮した食事の提供

施設内のコロナ感染症発生及び、高知県内の感染対応ステージに合わせ、施設入所利用者と通所利用者の食事場所での接触を避け、分散することで感染及び感染拡大防止に取り組みました。

②季節・イベント食実施

昨年度と比べ、イベント食の提供回数は減少しましたが、季節を感じられるような食事や、年末年始の行事食など、外出がなかなかできない利用者が楽しめるような食事を提供いたしました。

③非常食の計画消費

昨年に引き続き、施設で備蓄していた非常食を期限前に計画的に消費しました。日常の中で、非常食について利用者を知っていただき、少しでも食べ慣れてもらうことの大切さを知る良い機会となりました。

④厨房機器の保守管理

施設の開設時より使用している厨房機器が多く、機器トラブルも発生しています。2020年に実施した機器の総点検を今年度もメンテナンス会社へ依頼し、厨房機器の現状把握を行いました。

⑤栄養マネジメントの実施

施設入所利用者の栄養状態の評価を行い、面談を実施しながら利用者一人一人に合わせた栄養ケア計画を作成し、必要に応じて間食の取り方などの支援を行いました。

2023 年度へ

- ・現在休止している利用者への食に関する情報の提供を行っていきます
- ・コロナ禍でも楽しめる食事を定期的に企画します
- ・災害対策委員会と連携し、災害時の炊き出し体験や非常食の試食体験などを企画していきます
- ・給食委託会社であるエームサービスとの連携を図り、質の高い食事の提供を継続します

感染対策委員会の取り組み

■総括

2022年度は新型コロナウイルス感染症の対応が中心となりました。施設入所・グループホーム・通所の各事業から感染症が発生、就労継続支援B型ではクラスターとなり、職場環境の見直しを行いました。施設入所では「新型コロナウイルス陽性者発生時対応記録」を作成しました。関連事業と連携し初動の対応の見直しを行いました。役割分担が明確化される事で対応がスムーズに行うことが出来ました。新型コロナウイルス感染の対応で予定していた研修が未実施となったことを踏まえ、次年度は勉強会や研修が定着するような取り組みが課題となりました。また、3年ぶりに流行しているインフルエンザウイルスもワクチン接種を推奨し、現段階で施設においての流行の兆しは認めていません。

■実施状況

	実施日	
第1回	2022年4月28日	新人職員研修
第2回	2022年5月26日	新人職員研修
第3回	2022年6月23日	
第4回	2022年7月28日	
第5回	2022年8月25日	
第6回	2022年9月22日	
第7回	2022年10月27日	新人職員研修
第8回	11月末実地	臨時感染対策委員 11/7（麻疹疑い）
第9回	2022年12月22日	
第10回	2023年1月26日	新人職員研修
第11回	2023年2月23日	
第12回	2023年3月23日	
訓練	シュミレーション	5/15（就労）5/23（B型）5/31（生活訓練部、グループホーム） 11月入所個別指導

■実施内容

- ①月1回の感染対策委員会開催。
- ②新型コロナウイルス感染対策の実施。
 - ・「高知県新型コロナウイルス感染対応レベル」に応じ、職員のスクリーニングを実施。
 - ・コロナウイルス陽性者発生時対応記録用紙の作成。
- ③感染対策に関するチェックリストを作成し、内容の修正。
- ④体調不良の職員・利用者への対応の強化。
体調不良の際の報告の徹底、有症状の確認、発熱者に関しては病院受診を勧め、個室隔離とし初動の対応を徹底。

■新型コロナウイルス感染状況

	職員	施設入所	グループホーム	通所
新型コロナウイルス	15人	9人	6人	26人
インフルエンザウイルス	1人	0人	1人	0人

2023年度へ

- ・引き続き感染対策としての標準予防策の周知と実施を行います。
- ・感染対策マニュアルの見直しと施設の実態を踏まえた実践可能な内容に改訂していきます。
- ・委員会での検討内容、決定事項が全職員へ周知徹底されることを目指します。

虐待防止委員会の取り組み

■総括

2022年度は、ウェブと合同開催としてファミリーユ高知全体での取り組みに変更しました。虐待につながる可能性と思われる事象や、これって虐待にあたるのか等の事例を各事業から発信していただきディスカッションを行いました。結果、より職員の意識を虐待防止の観点に向けることができたと思います。10月には昨年に引き続き、障がい福祉課の協力を得て法人全体での研修を開催する事が出来ました。内容もリアルな事例を通してのグループワークを行い、前年度からステップアップした研修会を開催できたと思います。また、令和4年度から虐待防止委員会の設置と職員への情報共有等が義務化されており、既存のマニュアルの見直しと職員への周知をはかり取組強化に努めました。

■虐待防止委員会

- ・毎月1回（第2木）開催。事例検討実施。内容により障害福祉課と連携を取り対応実施。
- ・必要に応じて臨時虐待防止委員会実施。（4回）

内容：①就労移行：利用者からの飲酒後酩酊状態での頻回の着信に対する着信拒否の対応協議
②キュール：児からのSOSで擁護者からの虐待が考えられたが、虐待案件とはせず
③キュール：学校の本児に対する対応が虐待ではないか
④緊急ショート：経済的虐待が疑われるケース

	実施日/訓練想定
新入社員への法令虐待研修	新規採用職員を対象に実施。 内容：法人虐待研修動画の視聴及び自己チェックシートの実施
社会福祉法人ファミリーユ高知 虐待防止研修	2022年10月15日 会場：春野文化ホールピアステージ小ホール 時間：14：00～15：30 外部講師：障害福祉課 深木 守様 須藤 敏広様

■虐待防止研修

※研修に参加されなかった職員に関しては、当日の撮影した研修動画を視聴の上、研修報告書を作成し提出していただきました。



研修会の風景



研修会の風景

2023年度へ

- ・虐待防止研修の内容を早期に準備企画し、全職員の更なる意識向上に向けての取組強化
- ・虐待防止マニュアルの定期的な見直し・改善
- ・委員会等の内容を全職員へ周知徹底

身体拘束適正化検討委員会の取り組み

■総括

2022年度は、ウェブと合同開催としてファミリーユ高知全体での取り組みに変更しました。虐待につながる可能性と思われる事象や、これって虐待にあたるのか等の事例を各事業から発信していただきディスカッションを行いました。結果、より職員の意識を虐待防止の観点に向けることができましたと思います。10月には昨年に引き続き、障がい福祉課の協力を得て法人全体での研修を開催する事が出来ました。内容もリアルな事例を通してのグループワークを行い、前年度からステップアップした研修会を開催できたと思います。また、令和4年度から虐待防止委員会の設置と職員への情報共有等が義務化されており、既存のマニュアルの見直しと職員への周知をはかり取組強化に努めました。

■身体拘束適正化検討委員会 実績

1	2022.4.14	身体拘束適正化検討委員会
2	2022.4.22	臨時身体拘束適正化検討委員会（面会・通信制限について）
3	5.12	身体拘束適正化検討委員会
4	6.9	身体拘束適正化検討委員会
5	7.14	身体拘束適正化検討委員会
6	8.11	身体拘束適正化検討委員会
7	9.8	身体拘束適正化検討委員会
8	10.13	身体拘束適正化検討委員会
9	11.10	身体拘束適正化検討委員会
10	12.8	身体拘束適正化検討委員会
11	12.23	臨時身体拘束適正化検討委員会（ベッドマットセンサー使用について）
12	2023.1.12	身体拘束適正化検討委員会
13	1.31	臨時身体拘束適正化検討委員会（フットコールセンサーマットについて）
14	2.9	身体拘束適正化検討委員会
15	3.1	臨時身体拘束適正化検討委員会（ベッドマットセンサー使用について）
16	3.9	身体拘束適正化検討委員会

■身体拘束の現状

1. キュール：送迎等乗車時の体幹ベルト装着。
 2. 施設入所：転倒防止のため離床センサーコールマット及びフットコールセンサー
- ※支援計画書にも身体拘束に関するプラン立案し対応。

2023年度へ

- 虐待防止研修の内容を早期に準備企画し、全職員の更なる意識向上に向けての取組強化
- 虐待防止マニュアルの定期的な見直し・改善
- 委員会等の内容を全職員へ周知徹底

教育委員会の取り組み

■総括

前年度に引き続き、第2回成果発表会を実施し理事長はじめ医療機関や評議員のみなさまにも知って頂く機会となった。また新たな取り組みとして【個別事例報告会】を9カ月に渡って実施し、常勤職員34名全員（下期新入職者除く）がそれぞれの大切にしている支援感を発表できた。

また、入職者に対しては各部署の研修担当者と連携し、役割確認の見直しを図った。

■実施状況 毎月1回（第2木曜日）開催

実施月	実施内容
6月	第2回成果発表会
7月	笠松/福西/瀧石
8月	今西/山添/田村/谷口
9月	大原/柏木/岡村/半田
10月	佐竹/藤本/浅岡
11月	徳廣/吉野/谷岡/野本/坂上
12月	濱田/藤岡/杉本/北川
1月	黒原/中平/橋本/恒石/山田
2月	別役/大上/土居/元木/島内
3月	中内



7/2 成果発表会より



8/11 個別事例報告会より

■実施内容

①新人および経験者入職者に対する研修計画立案と実施

新入職者が各事業や各職員を知るために実施。研修の状況を加味することで適材適所の配置につながっている。

②成果発表会、個別事例報告会の準備運営

昨年に引き続いて第2回の成果発表会の開催。新たに「私の支援を聞いてよ」と題した各職員の支援プロセスを参加者参加型で9カ月間実施し、大きな成果を得た。

③各部のニーズ把握と今後の実施に向けた検討

多機能で事業を運営していく中で利用者の先を見据える上で他事業の実情などを把握する有用性があり、また理解を進め協働するために現職者研修の実施を具体的に検討した。

④職員研修内容の見直しに向けた意見交換

各部署や各研修担当で指導や助言の方法が異なる現状があり、個々の違いを活かす方法や共通すべき事項などの必要性があることが挙げられた。

⑤職員のモチベーションを高めるきっかけとなる研修企画

他業種や興味関心が高いテーマをきっかけに障害福祉サービスを考えるなど幅広い視点を持つ企画などを検討した。

2023年度へ

- ・法人が掲げている職員像である「目の前にいる人の人生を本気で考え・行動できる人」の育成に一步ずつでも近づける機会の創造と行動
- ・研修機会の増加とアップデート
- ・職員同士や部署間の理解につながる機会の実施

災害対策委員会の取り組み

■総括

2022年度はコロナの影響で定期的な委員会の開催や職員の研修に支障が生じたものの計画されていた利用者と職員を対象とした避難及び防災訓練は日程通り実施でき、その内容についても災害に対する意識の低下も見られることなくそれぞれが参加できていた。その他職員用設備研修の実施によって施設内設置の消火機器への関心及び知識を高めることができた。

■避難及び防災訓練

・実施状況

	実施日/訓練想定
水害訓練	2022年6月9日(木) ・日中(日中想定) ・グループホーム(夜間想定) ◆キョールは7月28日(木)実施(夕方想定)
火災訓練	2022年9月1日(木) ・施設入所(夜間想定) ・日中(日中想定) ・グループホーム、キョール(夕方想定)
消火・避難設備体験	2022年12月7日(木) 救命袋、消火栓、消火器体験等 ◆職員のみ
地震火災訓練	2023年3月23日(木) ・施設入所(夜間想定) ・日中(日中想定)キョール含む ・グループホーム(夕方想定)

※三誠産業株式会社協力

■災害対策委員会

- ・実施回数：10回(2022年4月～2023年3月)
- ・実施内容：BCPの更新(5月、11月) 各避難誘導訓練の計画、実施、振り返り
備蓄品の提供と補充、防災設備研修

2023年度へ

- ・災害時に起こりうる状況を情報収集し、より実際の想定に近い形での避難訓練を計画、実施
- ・BCPの見直し、更新
- ・各委員の災害対策、予防についての知識を高める
- ・BLS研修の実施
- ・備蓄品を利用した炊き出しの実施
- ・行政や春野地域との情報交換を行い、災害時の役割を考える

地域交流委員会の取り組み

■ 総括

新型コロナウイルス感染症の流行から約3年が経過し、地域では自粛が緩和に向かう流れとなっておりますが、障害・高齢者施設等においては感染対策に心を砕く日々が続いています。その中でもせめて当センター内でのイベントは安心・安全に楽しんでいただきたいと思います。利用者が五感を使って参加できるイベントを実施しました。特に11月3日の秋祭りにおいては利用者が楽器演奏や販売の就労体験に参加するなど昨年度までは行えなかった企画ができたと思います。来年度は障害者スポーツセンターとの共催で秋祭りが行える見通しがあるため、地域の方と広く繋がっていきたいと思います。

■ 開催イベント一覧

実施日時	イベント名	内容
4月18日～5月10日	端午の節句	鯉のぼり、5月人形飾り
7月7日	七夕イベント (どっちの料理ショー)	選択メニュー(うな丼 or 大人様ランチ) 七夕飾り
11月3日	ハビリの秋祭り 内ノ谷秋祭り	ステージイベント (ハンドベル演奏、マジックショー) 利用者出店、外部業者出店、絵馬、花火 内ノ谷秋祭り参加
12月22～29日	クリスマス	中庭にイルミネーションの展示、 食堂にツリー展示
1月6日	お餅つき	餅つき体験、餅の振る舞い
1月4～16日	年始の運試し	おみくじ設置、飾りつけ
3月29日	お花見	イベント食の提供、ステージイベント 外部業者出店



ハビリの秋祭り



内ノ谷秋祭り



お花見

2023年度へ

- ・季節感のある定期イベントは継続して実施します。
- ・マナー化しないようメインとなるイベントは発展、または別企画を準備します。
- ・11月3日の秋祭りは全職員が一丸となって参加できるよう旗振り役を務めます。

事故報告

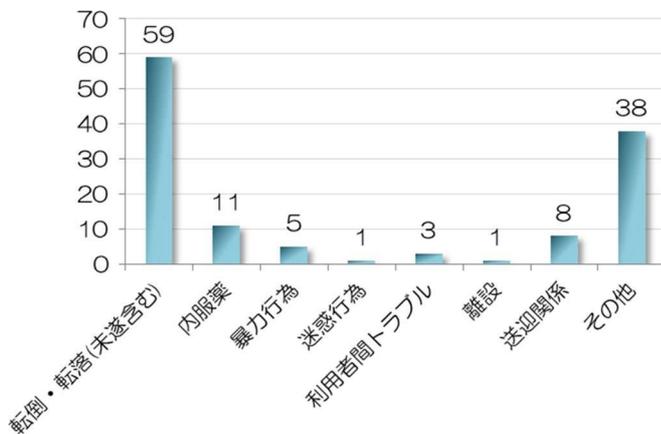
■ 総括

各事業で提出された事故やインシデント・アクシデント報告の検証を行い、リスク回避が出来るように努めています。利用者に影響がなかったインシデント 126 件・アクシデント 13 件で、事故レベル 3 はキュールの特定児童の衝動行為での物損事故です。事故レベル 4 では、転倒による骨折が 4 件と横紋筋融解症による救急搬送の 1 件が報告されています。転倒に至った利用者は 58 から 65 歳代の移動時の転倒であり、身体機能の低下によるものと評価しています。もう 1 名は膠原病に対する長期ステロイド投与による骨粗鬆症にて腰椎圧迫骨折をおこしています。いずれも病院受診と継続治療で後遺症等なく回復されています。

■ 事故発生状況

事故レベル	事故レベル定義	障害者 支援施設	アルパーテ	はるの ハビリ ホーム	キュール	法人本部	その他	全体
0~1 (インシデント)	ヒヤリ・ハットすることはあったが利用者に影響はない 何らかの可能性があり経過観察の結果影響はない	89	16	9	12	0	0	126
2 (アクシデント)	医療機関への受信が必要となった 受診の結果、縫合や固定処置などは必要なかった	5	2	2	4	0	0	13
3 (事故)	受託先や発注先とのトラブルやクレームに対して謝罪や弁償を行った。利用者間同士のトラブル				1			1
4 (事故)	事故のため通院治療や長期にわたり治療や入院が必要となった	2		3				5
5 (事故)	事故が死因となった 自傷・他傷（自殺企図や暴力）にて病院受診となった							0

■ インシデント 126 件の内訳



【転倒の分析】

- ・移動手段は車椅子と歩行が半数ずつ
- ・転倒の 5 割が居室で発生
- ・支援時間外での転倒が 7 割
- ・転倒未遂の報告は 2 %
- ・転倒を繰り返す利用者は精神的不調または高次脳機能障害を伴う
- ・身体障害の既往が無い方の転倒は 6 割が 60 歳代、2 割が児童

【対策】

- ・移動手段の違いによる転倒リスクの大小は無く、ご利用者ごとに個別の評価が必要と思われる。
- ・支援時間外の居室での転倒を予防するためには居室内の環境調整や動作指導が重要である。
- ・昨年度に比べ転倒未遂の報告が少なく、ヒヤリハットの時点で報告と転倒予防の視点を周知する。
- ・複数回の転倒がある利用者に対しては単純な指導や対策に止まらず、精神的不調に対する医療機関との連携や、高次脳機能障害に配慮した専門的視点での対策が必要と思われる。
- ・児童の転倒は突発的な動作などで予見しにくい側面があるが、安全な環境での支援が求められる。
- ・加齢による転倒は骨折等の事故に繋がりがやすいため、生活の中での定期的な運動機会の設定や身体機能の低下予防の社会資源利用など予防的な視点で支援する。

2023 年度へ

- ・事故等発生時において適切かつ迅速な対応をとるとともに、事故等の発生要因や再発防止策の実効性を検証し、利用者等に対するサービスの質の向上及び施設等の運営の適正化に努めます。
- ・理学療法士、や作業療法士にて通所利用者の麻痺用装具（短下肢装具、長下肢装具）や、杖・車椅子等のチェックを行う「ブレースチェックラウンド」を企画し、安心安全な移動ができる支援を行います。

ご意見・苦情

■総括

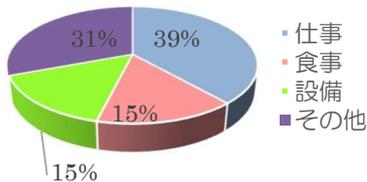
ハビリの4カ所にご意見箱を設置し、利用者の方々からの意見をまとめています。ご意見箱に投書された意見はサービス管理責任者が定期的に回収し、迅速に問題解決に取り組み、ご意見に対する回答を掲示しています。昨年度と比較し、ご意見箱への投書は増加傾向にあり、特に分類が出来ない『不明』の内容が増えています。

昨年の要望内容は設備に対する意見が多かったのですが、今年は仕事に対するご要望が増えています。また苦情内容では職員に対する苦情は減少していますが、ご利用者に対する苦情が増えています。職員に対するご意見には、部会で共有し支援員への聞き取りを行い、現状の把握と再発防止に取り組みました。今後もいただいたご意見をもとに検討を重ね、出来る限り要望に応え、利用者の満足につなげる努力を行っていきたいと思います。

■ご意見箱の内訳

内容	要望	意見	不明	苦情	合計
2022年度	19	3	58	24	104
2021年度	17	7	7	21	52

要望内容



苦情内容



苦情内容（利用者に対する）

- ・特定の利用者の言動に対するもの（職員に対する）
- ・特定の支援員のしぐさ・言動に対するもの（食に対する）
- ・味付けや塩分量に対するもの

要望例

- ・ホームにwifiをつけてほしい
- ・職員を増やしてほしい
- ・バイクングをしてほしい
- ・お味噌汁の量を増やしてほしい

上記以外に第三者委員の方への相談が2件、高知市障がい福祉課を交えて対応している相談が1件ありました。1件は利用者の保護者の方からの相談で、支援の内容や施設の取り組みを説明することで解決できました。1件はご利用者の方からの相談ですが、グループホームの支援内容とご本人の身体状況の乖離が原因となっており、なかなかご本人に理解していただくことが難しく、現在も話し合いが続いています。最後は児童の保護者の方ですが、転倒による骨折に端を発し、次々と支援に対して気になることが増えているようです。保護者から定期的に高知市に相談されていますが、その都度丁寧に対応しています。

2023年度へ

- ・苦情への適切な対応により利用者の満足度を高めることや、早急な虐待防止が講じられ、利用者の権利を養護するとともに、福祉サービスを適切に利用することが出来るよう支援に努めます。
- ・苦情解決を密室化せず、社会や客観性を確保し、一定のルールに沿った方法で解決を進めることにより利用者主体の質の高いサービスの確保、及び支援に努めます。

はじめに

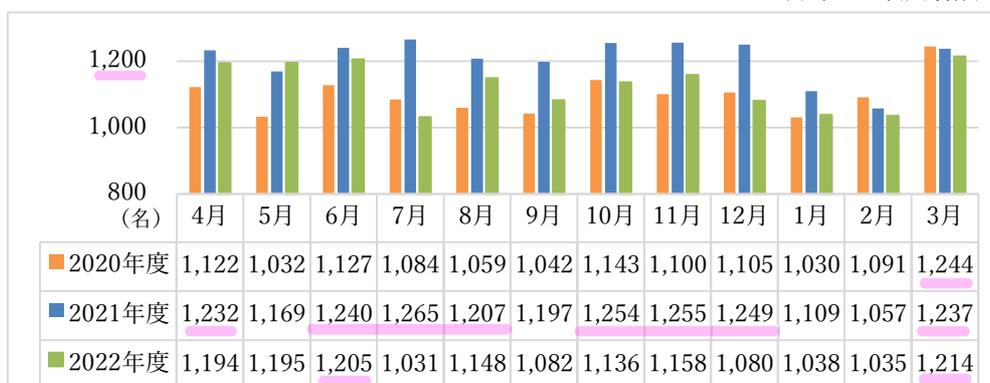
2022年度は新型コロナウイルス（以後コロナ）の第7波8波の猛威により、利用者やその家族の感染による長期の休み、感染を身近に感じた利用者や家族が健康を案じて月単位で欠席してしまう事態が起きてしまいました。職員もまた自身や家族の感染、ウイルスを持ち込んでしまう不安に日々直面しながら業務を行い、肉体的にも精神的にも辛い時期が続きました。その影響は委託事業にも及び、生産自体をストップする商品も相次ぎ、軽作業が止まってしまったり利用者が大勢休むことで生産量が減ってしまったりと2020年から続くコロナ禍で、最も影響を受けた一年となりました。

事業実績概要

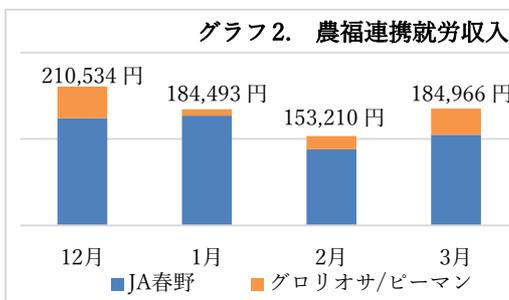
昨年度同様“月延べ利用者数 A 型 B 型合わせて 1,200 名”を目標とし取り組んできました。到達できたのは6月と3月の2回のみ。(グラフ1参照) 前述した理由により A 型 B 型ともに利用者数は前年度よりも約 1,000 名激減し、軽作業の就労収入も減ってしまいましたが、

グラフ1. A型B型 月毎延べ利用者数

クリーニング事業や農福連携の推進により、A型は最低賃金以上を保障、B型は月平均25,000円以上の工賃を維持することができました。また、コロナ禍でありながらも、きたほんまちマラソンや文化祭、映画上映会などの小さなイ



イベントや自然災害、健康についての研修会などを開催することもできました。なかでも農福連携に関しては、JA 春野での施設外支援や三里地区のグロリオサ作業などは『障がいがあるから安くできる』ではなく『障がいがあっても同等に働ける』を大事に取り組むこととし、今では農家にとっても利用者にとっても、私たちにとっても大変有意義な取り組みとなっています。



働き方の見直し

2021年度から職員が全員参加する定期的な会の撤廃、定時内での業務遂行の2点の改善を引き続き実施しています。すべての会を撤廃するのではなく必要な会は部署や全体で開催し情報共有や意見交換を行い、サイボウズの活用や日報の工夫なども行いながら誰もが働きやすく分かりやすい環境づくりを行いました。残業時間が減ることで、職員の負担軽減、ライフワークバランスの充実、経費削減にもつながっています。また、パソコンやインターネット環境、データを保管する機材やシステムを一新し、情報の機密性と安全性を向上させました。それでも日々作成するシートやケース記録などが一括管理できないことや作業が煩雑になってしまうこと、また個人情報管理の観点から、就労やウェーブのサービスにあったソフトの導入なども今後検討していく必要があると思われます。



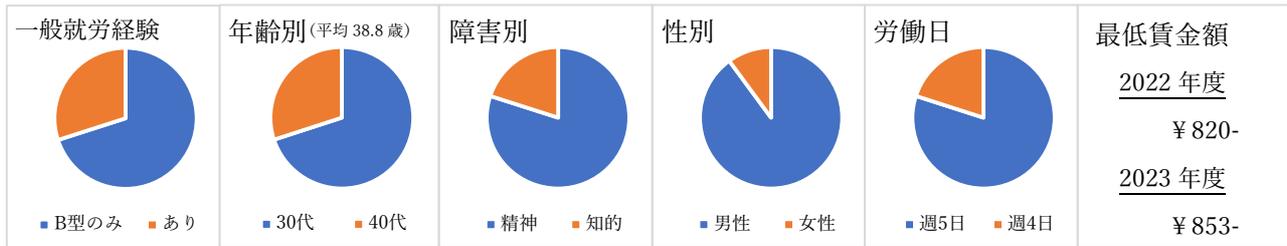
2023年度に向けて

長く続いたコロナ禍での支援にも漸く夜明けが見えてきました。これまでできなかった支援や活動、他事業所や家族とのつながりを再開し、再出発、再起する年として『REBORN』を掲げ、利用者だけでなく職員も、思い描く夢や希望を実現する一年としたいと考えています。

職員数 12 名 (3月末時点)	センター長（相談支援専門員兼務） 1名 相談支援専門員 1名 サービス管理責任者（うち1名支援員兼務）2名 事務員（支援員兼務） 1名 支援員 7名																																
会議等	作業部会と職員会は廃止 経営戦略会：1回/月、虐待防止身体拘束適正化委員会：1回/月																																
委員会活動	委員会活動は基本的に利用者とともに活動することを主とし、必要に応じて研修会や集会を開催 虐待防止身体拘束適正化：支援の見直し、委員会の開催、ハビリ委員会への出席 工賃向上：平均工賃推移、作業収入と利用者工賃評価、賞与等の判断 防 災：BCP作成、3ヵ月毎避難訓練研修の実施 広 報：ふくらむ原稿、ウェブ新聞発行 衛生美化：BCP作成とシミュレーション、感染予防、月毎健康チェック 美化設備管理、緑化美化、車両管理 就労チャレンジ：企業見学、職業センターとの研修、ウェブ外での作業調整 地域協働：施設外での就労の機会、地域貢献、地域協力、農福連携 苦情解決：利用者からの苦情受付、利用者満足度調査の実施 教 育：年間教育計画、高知州市の研修企画、施設内研修企画																																
年間行事	6月 ファミリーユ高知成果発表会 10月 きたほんまちマラソン 11月 文化祭 12月 表彰式 3ヵ月毎 防災訓練や防災に関する研修																																
職員研修	<外部研修、資格取得> 精神障害者支援認定 1名 サービス管理責任者実践研修 2名 社会福祉法人会計事務（初級）1名																																
事故等状況	<table border="1"> <thead> <tr> <th>事故レベル</th> <th>分類</th> <th>件数</th> <th>詳細</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>レベル0</td> <td>インシデント</td> <td>0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レベル1</td> <td>インシデント</td> <td>14</td> <td>火傷3件/打撲1件/指はさみ1件/業務過失9件</td> </tr> <tr> <td>レベル2</td> <td>アクシデント</td> <td>2</td> <td>転倒打撲1件/熱中症高血圧1件</td> </tr> <tr> <td>レベル3</td> <td>事故（苦情）</td> <td>13</td> <td>軽作業3件/クリーニング10件</td> </tr> <tr> <td>レベル4・5</td> <td>事故</td> <td>0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>感染症</td> <td></td> <td>0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>車両事故</td> <td></td> <td>2</td> <td>物損事故2件</td> </tr> </tbody> </table>	事故レベル	分類	件数	詳細	レベル0	インシデント	0		レベル1	インシデント	14	火傷3件/打撲1件/指はさみ1件/業務過失9件	レベル2	アクシデント	2	転倒打撲1件/熱中症高血圧1件	レベル3	事故（苦情）	13	軽作業3件/クリーニング10件	レベル4・5	事故	0		感染症		0		車両事故		2	物損事故2件
事故レベル	分類	件数	詳細																														
レベル0	インシデント	0																															
レベル1	インシデント	14	火傷3件/打撲1件/指はさみ1件/業務過失9件																														
レベル2	アクシデント	2	転倒打撲1件/熱中症高血圧1件																														
レベル3	事故（苦情）	13	軽作業3件/クリーニング10件																														
レベル4・5	事故	0																															
感染症		0																															
車両事故		2	物損事故2件																														
苦情等状況	6件 サービス提供についての苦情あり 内容：室内環境、支援員の行動、支援員の言葉遣い 検討結果：それぞれ検討会を開催し、3名の方への謝罪とともに対応策を提案させて頂き解決となっている。																																

就労継続支援 A 型

■2022 年度利用者状況を可視化（登録者 10 名）



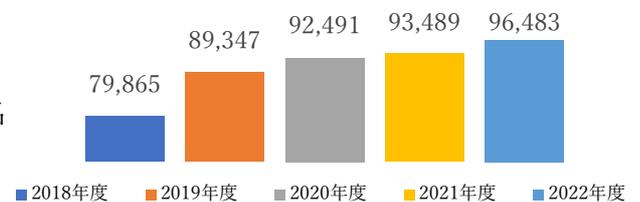
一般就労を経たうえで A 型を利用している方、B 型からステップアップで A 型を利用している方がそれぞれ利用し、年齢は平均 36 歳と若く一般の企業へ就職したいと希望されている方も数名所属している。精神障害の方が 8 割、慣れた環境や慣れた業務を行っていても不安感や気持ちの落ち込みが見られ、10 名雇用していることでの他者と自分との関係性や言動に悩みはつきないことも多く継続して勤務することは大変難しい。

■利用状況と平均賃金

登録者：10 名

一日平均利用者：約 8 名 月毎利用状況：約 189 名

月毎平均賃金 96,483 円（賞与除く）



■受託業務先

病院・クリニック：2 件 美容業界：1 件 整体：1 件 食品業界：1 件 農業：2 件

■2022 年度の事業目標達成度を評価 『ちがいをちからに ONE TEAM』

■品質向上とチームづくり

2022 年度も『品質向上』を掲げ、洗濯時や納品時の品質向上を目指し取り組んできた。洗濯前の番号チェックと納品前のチェックの誤差がほぼなく、ポケットチェックの徹底なども昨年に引き続き実施し、昨年の 27 件と比較し事故等の報告書の件数は 15 件、うちボールペンや印鑑の混入、インクの再汚染の件数は 3 件と激減している。

また、オウパス独自の検定試験を導入することで洗濯業の知識や技術を一定に保つことができ、月に一度のスタッフミーティングを開催することで全員が情報を共有し取り組むことが可能となった。

■農福連携からの恵み

2022 年の 11 月から JA 春野にて月曜から金曜、2 名ずつキュウリの出荷作業に出かけている。オウパスでは学べない厳しさ優しさ、仕事に触れることができ、参加しているスタッフがそれぞれ成長していると感じている。また外での仕事が収益アップにもつながった。

■未実施、未達成

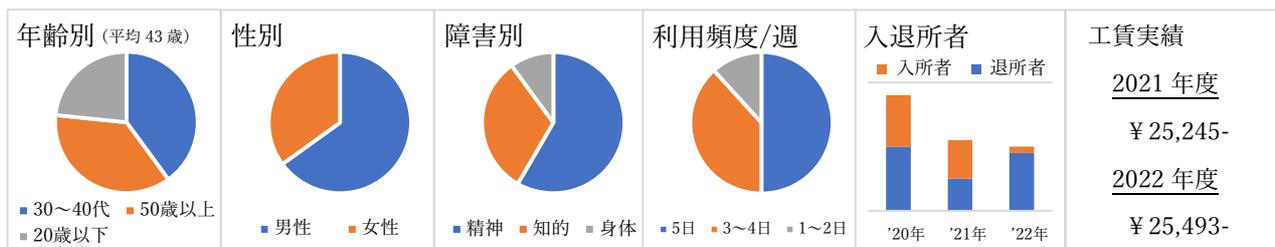
目標としてクリーニング師 1 名、一般就労者 1 名を目標としていたが、クリーニング師試験受験希望者や該当者がいなかったことや準備不足により受講できず未実施。また一般就労者に関しても 1 名が企業実習まで進んだが途中でうまくいかず実習中止となってしまった。

■総括

年度当初は 9 名雇用でのスタートとなったが 7 月には 10 名雇用に戻すことができた。就労収入では軽作業や施設外での就労に参加し年度を通して前年度よりも高い就労収入を得ることができた。JA 春野については 2023 年 6 月までと期限があるため別の作業を獲得し就労収入を維持、向上していきたい。ただ施設外への参加による人員不足と時間に追われ、小さな間違いや品質の低下という悪い面も見られ、目標の延べ利用者数 200 名に関しては体調管理や精神面での不安定さの課題もあり到達できない月も多かった。来年度はスタッフの養成と業務改善、新規雇用で稼働率を上げていきたい。

就労継続支援 B 型

■2022 年度利用者状況を可視化（登録者 60 名）



JR やバスなどの公共交通の駅からも近い立地のため通所される方が多く保護者の送迎で通所される方は知的障害の方が主である。年齢は 18 歳から 68 歳までの方が利用し平均年齢は 43 歳。精神障害の方が多くこともあり症状に合わせた利用頻度となっておりデイケアなどの医療的ケアを併用している方も多い。入退院を繰り返し休みがちになってしまう中でも継続して利用できるよう支援員とサービス管理責任者、相談支援専門員が連携し比較的安定的な出勤率を確保している。

■利用状況と平均賃金

登録者：60 名（軽作業登録：50 名 クリーニング登録：10 名）

一日平均利用者：約 44 名 月毎利用状況：約 938 名

月毎平均工賃：25,493 円

■受託業務先

- 自主事業：紙エプロン
- 清掃：近森病院周辺、施設内清掃
- 軽作業：パッド、昆布、ハーネス、お菓子食品箱詰め、ダイレクトメール
- クリーニング：病棟個人洗濯
- 農福連携：ミョウガ、キュウリ、グロリオサ、ピーマン等

■2022 年度の事業目標達成度を評価 『ひとりひとりの思いをみんなで明日、かたちに～PART2～』

■個別のかかわり

利用者一人一人の担当者制に加え、これまで年に一度だった工賃評価を 6 ヶ月に短縮。より細やかな評価とかかわりができ、その評価をもとに個別支援計画を立て実施することができた。

■農福連携

大津のミョウガ農家や三里のグロリオサ農家、JA 春野でのキュウリ作業など農業と連携することで軽作業や清掃では得られない仕事体験ができ、大きな収入源となった。

■居場所づくり

コロナ禍で感染するかもしれない恐怖と不安の中での作業となった。それでも自宅での支援の展開や安全に配慮したイベントの実施、様々な作業を行う機会の提供など小さなチャレンジを通して、利用者が私の居場所と思える支援が実施できた。

■A 型、一般就労へのステップアップの実現

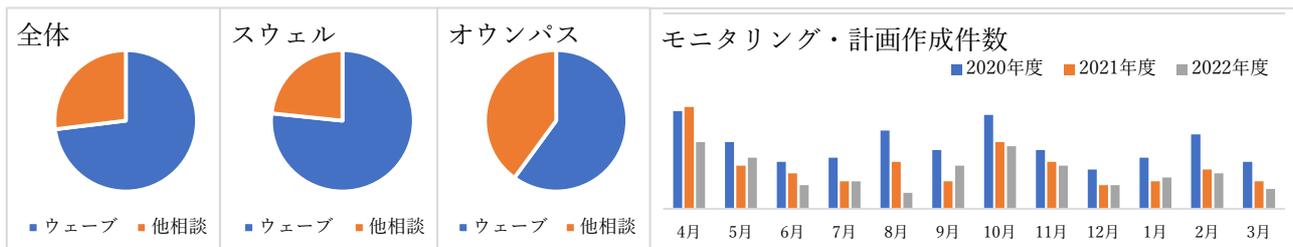
A 型へ 2 名、一般就労へ 1 名移行することができた。

■総括

今年度の新規利用は特別支援学校卒業後の 4 月に利用開始となった 1 名のみでその他から利用につながるケースはなかった。退所者は 8 名、一般就労と A 型へのステップアップで終了となった利用者がいた一方で 74 歳の最高齢の利用者が年齢的にも継続が難しくなり終了、また体調面や精神面での不安定さから就労継続が難しかった方も終了となった。終了となった利用者のうち 4 名が週 5 日利用だったことやコロナの影響休みも多く、前年度と比べると稼働率も思うように伸びなかった。来年度は稼働率を持ち直すことと、半年に一度の工賃見直しを引き続き行っていき一人一人アセスメントしていくことで就労を継続していくための必要なスキルの習得など支援員、サービス管理責任者など一緒に考え進めていきたい。

特定相談支援

■2022年度利用者状況を可視化（登録者 52名）



ウェブを利用されている利用者70名のうち52名はウェブ相談支援事業所が担っている。2019年度からウェブ以外を利用されている契約者は外部の相談支援事業所に依頼し、現在はウェブを利用している方のみ契約している。ウェブは精神障害の方が多いため医療との連携は必須であり、その他の障がいの方々も他のサービスやご家族との連携も必要となるため、相談支援事業所が同場所にあることは何よりも利用者の利益につながっており、支援員やサービス管理責任者と役割分担を行うことでより重層的な支援が実現できていると考えている。

■利用状況

ウェブ利用者：70名中52名（A型事業所登録：6名 B型事業所登録：46名）

新規：1件（他相談支援事業所から引継ぎ）

終了：6件（ウェブ終了に伴い終了）

■2022年度の事業目標達成度を評価 『みんなを笑顔に、にじいろ応援団』

■にじいろの関わり

地域で暮らしている利用者が多いと仕事以外の課題も多数あり、家事援助や訪問看護など在宅での生活を整えるためのサービス調整を行うことが多い一年だった。また年に数回しか利用できない利用者や体調が優れずほぼ利用ができていない利用者の終了などもあったが、長年利用してくれたことへの感謝としてありがとうメッセージを作成し、必要な機関へつなぐことができた。

■業務改善の必要性

相談支援専門員2名と事務で月に2回の進捗確認会を実施することで件数など進捗を確認できたが、ファイリングや書類の不備などがあり全ケースの確認を実施することとなった。課題として書類様式や記載方法の統一、定期的なファイリングチェックが必要であることが明らかとなった。

■思いの実現、幸福のための調整

同事業所での支援であるが、常に第三者的な視点に立ち支援を行うことができた。特にサービス管理責任者と家族、その他の関係機関とも情報共有を行い、利用者の思いを実現し、利用者がどうすれば最も幸福なのか、最善なのかを考えサービス等の調整を行うことができた。

■権利擁護、虐待防止の視点

現場の支援者や家族が支援方法や考え方に行き詰ってしまった際には支援の専門員として常に権利擁護と虐待防止の視点を持ちながら共に考えることができた。また障害分野のみならず女性の視点からみた防災研修や市社協との協同など地域での困りごとにも協力できるための研修にも参加し常に自己研鑽を重ねることができた。

■総括

2022年度は終了者が6名、新規利用者が1名であった。終了者6名のうち2名はそれぞれ他のA型、B型事業所へ移行し、残る4名は福祉サービスそのものの終了に伴う契約終了であった。放課後等デイサービスの拡充により、スウェル利用開始時には高等学校卒業時から相談支援専門員がついており、ウェブ相談支援事業所に代わることなくそのままスウェルの利用が開始になる方も多かった。また、虐待防止や権利擁護の研修に参加したことで、細かな言葉遣いやしぐさ、支援の方法などの日々の私たちのサービスへのアンテナを張り、随時検討する機会をもてた。2023年度はスムーズな業務の遂行と、多様化する利用者の思いをかたちに、また未来へ羽ばたけるかかわりを続けたいと考えている。